

明治後期風刺漫画における「国民」・「人種」ヒエラルキーの構築：

——西洋風刺漫画のステレオタイプとシンボルの分析を中心に——

大東文化大学 Ronald STEWART

1 目的

本報告の狙いは、明治後期に起きた漫画雑誌ブーム中、漫画家が西洋漫画のステレオタイプおよびシンボルなどの視覚的な言語を大いに取り入れ適応しながら、いかに国民的な「自己」とそれに対立した外国人を表現したのか、そして世界の中で「自己」はどこに位置つけたのかを明らかにすることである。当時、帝国主義と貿易の拡大、日露戦争、ポーツマス条約への不満、および米国における日本人移民に対する排斥運動などの背景で、日本人の外交と海外への関心、そして国民として意識が高まって、国際政治を諷刺にした漫画を売り物にした『東京パック』などの雑誌が人気を博した。

2 方法

分析対象は『東京パック』とそれを類似した雑誌を中心に、1905年と1912年の間に出版された風刺漫画雑誌に掲載された日本人という「自己」と他国の人という「他者」が一緒に表現された漫画である。社会学者レーモンド・モリスのカナダ風刺漫画研究で挙げられている風刺漫画家が主に使用する4つの技法を注目し分析する。その4つの技法は、美術歴史家ゴンブリッチが言う漫画家の武器である「コンデンセーション」（凝縮）と「コンビネーション」（融合）、社会学者ゴッフマンが言う「ドメスティケーション」（親近化）、そして言語学者ソシュールの記号論概念「オポジション」（二項対立）である。

3 結果

アメリカの漫画雑誌からモデルにした黒人および中国人などのステレオタイプ像が『東京パック』などの漫画家によく利用された。そして海外の漫画雑誌と同様に「自己」と「他者」の対立を作るために男性対女性の構造、洋服対民族服（文明対非文明）の対立、大きさの対立および動物化などの表現方法を使用した。それにより、力関係の差を付けることができ、同時に、西洋の思想である進化論および社会進化論的な世界ヒエラルキーを構築した。日本人と日本が西洋の国々と西洋人より劣っているがアフリカ、南洋、そして他のアジアの国と人より優れている構造が伺える。

4 結論

当時の日本人漫画家が西洋の漫画に見えるステレオタイプ像などによる国家・国民・人種のヒエラルキーを使用した。列強の国の漫画家と異なって、自分（自己）をヒエラルキーの頂点の置かなかったのである。この現象の理由として、3つ挙げられる。一つは、社会進化論で頂点にいらなくても、頂点に登る可能性がまだあること。一つは、海外と同じ視覚的な言語と構造を使ったら、対話がより簡単にできること（実際に、時々この時代の漫画が海外に波紋を投げかけた）。最後に、この時代の漫画家は完全に西洋の漫画の真似ではなく、中に自分の文化的アイデンティティを維持できたことである。

参考文献：

- 『東京パック』1巻1号(1905)-8巻13号(1912) (復刻版(1985-2000) 龍溪書舎)
スチュワート(2001)『パックス的秩序：1905~1914 漫画雑誌ブームにおける国家・民族・人種』(名古屋大学修士論文)
Morris, R. (1993). Visual rhetoric in political cartoons: a structuralist approach. *Metaphor and Symbolic Activity*, 8(3): 195-210
Morris, R. (1995), *The Carnivalization of Politics*, Montreal: McGill-Queen's University Press.